

2020年8月16日聖餐式説教

聖書に書かれている主イエスの物語がなされたのは、ガリラヤ地方と呼ばれる地方一体でした。その教えが宣べ伝えられる場所は会堂ではなく、湖のほとりや山の上などでした。約3年間にわたった伝道活動のうちにガリラヤ地方で主イエスの存在を知らない人はいなくなり、常に主イエスの周りには人ばかりが出来るようになって来ました。しかし人々の心にあったのは、主イエスが宣べ伝えようとしていた天国ではなく、珍しい奇跡でした。彼らは自らの悔い改めより、この世的な自分の利益を望んでいたのです。主イエスをこの世的な支配者にしようとしていたのはそのしるしでした。主イエスはそのような人々を前に、常に退いて祈っておられました。常に主なる神の御心に従うために、主イエスは祈ることを忘れることはなかったのです。

本日の福音書は、主イエスがガリラヤ地方を唯一離れて北部方面へ行かれたときの出来事が記されていました。この地はユダヤの人々にとって異邦の地です。十字架を目前に控えたことを感じておられた主イエスは、一時的にもファリサイ派の人々や群集を避けようとされました。ユダヤ人たちも、異邦の地までは主イエスについていかなかったのです。そしてもう一つ、福音が始めてユダヤの苗床を飛び出し、世界へと宣べ伝え始められた日でもあったのです。

しかしこの異邦の地においても、主イエスの話は伝わっていたのでしょう。一行の前に現れたのは重病の娘を持つ母親でした。彼女は主イエスと弟子たちについてきて真剣に助けを求めましたが、最初主イエスはこの女性に注意を払われませんでした。この女性は昔のカナン人の一人で、ユダヤ人からは宿敵とされていたからです。主イエスはユダヤ人を対象に伝道活動をされましたが、これはちょうど石を池に投げ込んだ時、波が回りに広がっていくようにまずユダヤの地に天国を宣べ伝えられたからです。まだその業が未完成のうちに異邦の地で伝道を行うことを主イエスはよしとはされなかったのです。しかしこの女性は帰ろうとせず、ずっとついてきたのでした。弟子たちはそれを見て、早くこの女性を追い払うようにと主イエスに求めます。単に関わりを持ちたくなかっただけでなく、異邦の地への差別心が弟子たちのなかにもあったのでしょう。

ついに主イエスはこの女性と向き合われます。この女性に誠の信仰を目覚めさせようとされたのです。「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」。この言葉はどういう意味を意味するのでしょうか。子供はユダヤ人を、子犬はこの女性をはじめとする異邦人を指していることは明らかです。人を犬呼ばわりされるといふ、侮辱とも思えるこの言葉を、主イエスはどのようにしてこの女性にかけられたのでしょうか。

まず、主イエスはこの女性を侮辱するつもりでこの言葉を掛けられたのでは

なく、いつくしみをもってかけられました。すなわちこの言葉のみをとらえるのではなく、その奥にある愛情と主イエスの真理への招きを感じさせる言葉だったのです。そしてこの犬という言葉の原語を見てみますと、ごみの山をあさる浮浪犬ではなく、家で飼われているかわいい犬を現す言葉が使われています。主イエスのこの言葉は、あなたも主なる神に愛されている一人であることを感じさせる愛に満ちていたのです。

「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」と女性は答えました。単に主イエスの言葉に怒りを発するのではなく、見事にその意向をとらえ、的確な答えをなしたのでした。この女性がすぐれていたのは確かです。しかしもう一つ、主イエスがこの答えにいつくしみをもって招いておられたことも事実です。『「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた』。主イエスのいわば高度な試験にこの女性は見事に合格し、主イエスの招きにあずかることができたのです。

さて、私たちがこの一年をかけて学びを続けておりますマタイによる福音書は、主イエスがおられたユダヤの国、ユダヤ人の救いのために書かれた福音書でありました。この物語もユダヤ人が読むために書かれています。ということは、読者はこの女性側の人たちではなく、彼らを異邦人と呼び、差別している人たちに対して書かれています。聖マタイは、異邦人としてユダヤ人が差別し蔑んでいる人々に、ユダヤ人にまさる信仰が培われている、主イエスは異邦人も天国へと招かれたのだ。ユダヤ人たちはいつまで主イエスを拒否しているのか、いつまで救い主として認めようとししないのか、聖マタイはこの物語を通して、異邦人は犬であると言ったのではなく、あなたがたは異邦人を呼び蔑んでいるが、自分たちの姿はどうか、自分たちの信仰はどうか、彼らを蔑むことは果たして出来るのかと、ユダヤ人の姿に挑戦をしたのです。

皆様もご承知のように、イスラエルでは昨今騒乱の只中にあり、私たちも悲惨なニュースを耳にしながら心配のうちに過ごしています。直接には20世紀に始まったといわれるイスラエルとパレスチナの争いも、起源をたどれば聖書の時代の対立にさかのぼることが出来ます。聖マタイの願い、聖マタイがこの福音書を書いた目的は、今日もなお達成されていないのです。ユダヤ人たちは、今日もなお主イエスを救い主と認めず、主イエスが宣べ伝えられた福音を受け入れようとはしていないのです。

ユダヤ人たちのかたくなとも言える態度に、わたしたちはマタイによる福音書を通してしばしば出合います。その度に、これは2000年前の出来事のみではなく、今日もなお続いている出来事であること、マタイの願いを今日の私たちが受け継ぎ、福音宣教に励んでいることを改めて思われます。特に平和について考える8月、主の栄光がこの世界に現され、人々の心が主の平和で満ちるよう、祈り願いたいものです。